



宗派こえ平和の誓い

東京 アジア仏教徒の集い

第二次世界大戦終結五十周年「不戦・平和の誓願に生きるアジア仏教徒の集い」が国連縮減週間の二十四日、東京・港区の都ホテルで二日間の日程で始まりました。アジア仏教徒平和会議(ABC P)日本センターが提唱したもので。アジア十二カ国から色とりどりの法衣をまとった三十六人の仏教徒代表が参加し、国内各宗派の仏教徒代表とともに、仏教の理念にもとづく武器なき世界と諸民族の連帯

をめざすための討論を活発におこないました。

「集い」では、日本セントラ理事長の中濃教導師が基調報告。冒頭で、日本仏教団の大部分が侵略戦争に協力・加担したことに「心からなる深い反省と深いさげの意」を表明しました。

中濃師は、「NPT無期限延長は、核兵器保有国の核兵器独占と永続化をねらったもの」と指摘。中国とフランスにたいし核実験続行の即時停

止を強く要求するとともに、「ヒロシマ・ナガサキからのアピール」署名行動をはじめ核兵器廃絶の行動をいっそう強めようと呼びかけました。

さらに、沖縄での米兵少女暴行事件にふれ、ABC Pの九三年の「ハノイ」宣言で確認された、アジア地域から外国軍事基地を撤去し、軍事同盟・ブロックを解消させる方向についても、緊急性が強まっていると述べました。

討論では、ベトナム、バングラデシュ、インドなどの代表が発言しました。

「集い」は二十五日もつづけられます。

「集い」に先立ち、二十四日午前、日本とアジア各国の仏教徒代表は、東京都港区の芝・増上寺で、すべての戦争犠牲者のめい福を祈り、「戦争犠牲者追悼平和祈願法要」をおこないました。